

子どもの主体性を支え育む保育者の援助について

－ 5歳児の協同的な遊びの事例より考える－

本 村 弥 寿 子

Supporting and nurturing children's independence through childcare workers

－Thinking about cooperative play among five-year-old children－

Yasuko MOTOMURA

長崎女子短期大学紀要 第51号 令和7年度 別刷

Reprinted form

Nagasaki Women's Junior College Annual Report of Studies, 51 : 86 - 93

2026

研究報告

子どもの主体性を支え育む保育者の援助について

－ 5歳児の協同的な遊びの事例より考える －

本 村 弥 寿 子

Supporting and nurturing children's independence through childcare workers

－Thinking about cooperative play among five-year-old children－

Yasuko MOTOMURA

キーワード：環境を通して行う教育 子どもの主体性 保育者の意図性 遊び

1 はじめに

令和6年12月、「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」諮問がなされた。これにより、学習指導要領等の改訂に向けた取り組みが始まった。この諮問において幼児教育に関しては『『幼保小の架け橋プログラム』の成果と課題を踏まえつつ、幼児教育では『環境を通して行う教育』が基本であることに留意し、幼児教育と小学校教育との円滑な接続の改善についてどのように考えるか。また、設置者や施設類型を問わず、幼児教育の質の向上を図る共通の方策についてどのように考えるか』とある。「幼児教育と小学校教育の接続」「幼児教育の質の向上」が検討事項として挙げられているのであるが、「幼児教育と小学校教育の接続」の検討には、幼児教育の基本である「環境を通して行う教育」への留意が明記されている。このことから、幼児教育が基本としている「環境を通して行う教育」についてあらためて再確認し、今後も質の高い幼児教育・保育を目指した改善に努力することが必要である。

幼稚園教育要領解説には、環境を通して行う教育とは、「環境の中に教育的価値を含ませながら、幼児が自ら興味や関心を持って環境に取り組み、試行錯誤を経て、環境へのふさわしい関わり方を身につけていくことを意図した教育である」と示

され、「それは同時に、幼児の環境との主体的な関わりを大切にした教育である」と続いている。さらに、「幼児の主体性が何よりも大切にされなければならない」とも記されている。よって、保育者は、子どもの主体性を大切にした保育実践を目指すことが常に求められており、「主体性」を大切にした保育を心掛けることが、基本を踏まえた保育を展開することにつながると言える。では、子どもの主体性を大切にした幼児教育・保育とはどのようなものであるのか。本稿では、保育実践を紐解き、子どもの主体性を大切にした保育について、そして、実践するうえで留意すべきことは何かについて考察する。

2 「主体性」について

そもそも、「主体性」とは何か。『大辞泉』によると、「自分の意思・判断で行動しようとする態度」とある。よって、子どもの主体性を大切にした幼児教育・保育とは、子どもが自分の意思・判断で行動することを尊重する保育と言えよう。一方、幼稚園教育要領には、幼児教育を行う際に重視する事項として、幼児の自発的な活動としての遊びを通しての指導を中心として行うよう記されている。子どもが、自分の興味・関心に基づいて自ら取り組む活動が遊びであることを踏まえると、

まさに子どもの「遊び」を大切にすることが、子どもの主体性を大切にしたい幼児教育・保育であるといえる。

ここで留意すべきことは、子どもの主体性を大切にすることは、子どもを放任することではないということである。子どもが自ら環境に関わり、主体性を発揮して生活を展開しながら望ましい方向に向かって発達が進められるよう、保育者は計画性を持った適切な幼児教育・保育を行わなければならないのである。つまり、子どもの主体性と保育者の意図性をバランスよく絡み合わせて行うことが求められている。子どもの主体性を大切にしたいという思いから、子どもの「自由」を優先する保育を行ってはいない。「主体性」は育たない。一方、保育者が立案した計画に子どもを取り込む保育を行ってはいない、一層、子どもに「主体性」は育たない。両者をいかに絡み合わせて保育を展開していくか、保育者が常に悩むことである。

子どもの主体性を大切にしたい保育実践の方法に、「このようにすればよい」という正解はない。日々の保育実践を振り返り、「主体性は発揮できているか」「保育者の援助は適切か」と反省・評価し、改善を積み重ねることが大切である。そこで、次に、保育実践の事例を挙げ、子どもの主体性を大切にしたい保育と教師の援助について考察する。

3 子どもの主体性に係る事例

先に述べたように、子どもの主体性を大切にしたい幼児教育・保育とは、子どもの「遊び」を大切にすることと言える。そこで、年長児の協同遊びを取り上げ、子どもが主体的に活動を展開していくために必要な保育者の援助について振り返り、子どもの主体性を大切にしたい保育について考察を行いたいと考える。

【事例「ねんちょうなんでもショー」】

○2学期初めより、弁当前の時間を利用して、「おとうばん」の子どもが中心となって遊びやゲームなどの出し物を提供し、クラスみんなで楽しむ時間を確保していた。遊びの内容は「しりとり」や「なぞなぞ」が多かったが、「手品」を披露する

グループも増えてきた。

<事例①：11月12日（金）>

保育室の絵本コーナー前の座卓で、F子とM子が鉛筆を使った手品に繰り返し挑戦していた。保育者は、弁当前の時間に披露する手品の練習をしているのだらうと考えた。そして、「手品が他にもいろいろ載ってるよ。見てみる？」と子ども用の手品の本（まんがが形式で手品の進め方や仕掛けが示してある）を提示し、一緒に本を見ることにした。F子とM子は本に興味を示してページをめくり、M子が本に掲載されているハンカチの手品を練習し始めた。そこにY男も加わり、F子とY男と一緒にトランプの手品に取り組み始めた。

保育室で別の遊びをしていたH男が“まじっくやさん”と紙に大きく書いて机に張り付けその机を保育室前の渡り廊下に出した。

F子、M子、Y男、H男は、机を置いた渡り廊下で通りがかりの友達に手品を見せて遊び、ちょっとした手品ショーとなった。

F子とM子は生活グループが同じである。次回の“お当番の出し物”で手品を披露しようと考え練習を始めたと思われる。

これまでの手品の出し物の内容は、“鉛筆手品”ばかりであった。そこで保育者は、子どもたちに様々な手品に挑戦してほしいと思い、手品の本を提示する機会を探っていたところであった。この時、まさに本を提供する機会ととらえて紹介したところ、F子とM子は本に刺激を受け、一層手品に興味・関心を持つに至ったと思われる。さらに、保育者も一緒に楽しげに取り組んでいたことが功を奏したのか、Y男が加わったりH男が遊びを広げるアイデアを出したりすることにつながっている。

11月は、年長組の後半ということで、子どもが小学校への進学を意識するようになる時期である。保育者としては、運動会を経験してクラスの集団意識が強くなっているこの時期、“おとうばん”のメンバーで気持ちを合わせ、クラスのみならず

楽しむ機会を作るようにしたいという願いを持っていた。加えて、様々な手品に挑戦してほしいといった願いも生じていた。そのような時に、子どもから取り組み始めた手品の練習とがうまく絡み合い、一つの遊びが大きく動き出した瞬間であったように思われる。

この日はまだ“小さな手品ショー”であったが、楽しい時間を多くの友達と共有すれば、きっと次週も遊びを続けるだろうと予想した。そこで保育者は、観客になるなどして遊びを盛り上げる役割を果たすことにした。

次の週は、11月15日（月）から11月17日（水）まで行事が入り、“まじっくやさん”は行われなかった。

<事例②：11月18日（木）>

“まじっくやさん”の机に、保育者が水色のテーブルクロスを掛け、そこに、H男が書いた「まじっくやさん」の看板を貼って、登園時に保育室の中央に置いておいた。前週“まじっくやさん”を行った4名は、保育者が用意した机に輪飾りをつけたり看板に書き込みを加えたりして準備を始めた。保育者はそのような子どもの姿を見守り、要求してきた材料や用具を準備して、子どものイメージが実現できるよう援助した。

J男とS男が、年少・年中組へ自ら赴き、マジックショーの宣伝を行った。そのおかげで、多くの年少・年中児が観客として集まった。

披露した手品は、練習不足であったり手品とは言えないようなものであったりした。しかし、観客として参加した年少・年中組の保育者や実習生が「おおー！」「すごい！」「さすが年長さん！」などと大いに盛り上げ、参加した年長児、観客の年少・中児みんなが楽しみ、笑顔で終了することができた。

11月12日に始めた“まじっくやさん”であるが、土日を含み、さらに行事が続いたため、約一週間の間を経てようやく取り組むことができた。間が空いたものの、子どもにとって「楽しかった」経

験として認識されていればまた取り組むと思われたため、保育者は“まじっくやさん”で使用した机に目立つ色のクロスを掛け、保育室の中央に設置した。事例②より、この環境構成は、子どもたちの気持ちを“まじっくやさん”に向けることに大いに役立ったことがわかる

事例②では、12日には全く“まじっくやさん”に関わっていなかったJ男とS男が、進んで宣伝部隊として関わってきた。12日に自分の遊びを楽しみながらも、“まじっくやさん”の楽しげな様子を見ていたのだろう。そして、“まじっくやさん”をいかに盛り上げるか、自分たちにできることを考えて実行に移したと思われる。この日も“まじっくやさん”はとても盛り上がった。J男とS男はその様子を見て達成感を味わったことであろう。

“まじっくやさん”を一層楽しい活動にするために、子どもたちなりにアイデアを出して実現に向けて動き出している。「“まじっくやさん”をしよう！」という一つの目標に向かって、それぞれの子どもが主体的に遊びに取り組んでいる姿である。

<事例③：11月19日（金）>

朝、“まじっくやさん”の準備をしている子どもに、「お遊戯室で“まじっくやさん”やろうか」と保育者が提案した。すぐに15名ほどの子どもが集まり、必要なものを遊戯室に運び入れ、10分ほどでステージ上にショーの環境を作り上げた。「じゃあ、人形劇もやろう」「音楽会はどうかな」と、子どもたちからも提案が出て、すぐにそれらの演目に必要な用具を自分たちで準備した。

9：30から10：30までの約1時間、友達や年少組を観客としてショーが開催された。保育者は、進行役や解説役を担い、ショーをスムーズに進め、雰囲気盛り上げるように援助した。

保育者は、子どもたちの前日の遊びの姿から、一層意欲的に“まじっくやさん”を楽しめるようにと願い、遊戯室で行うことを提案した。遊戯室

のステージを使用することは子どもにとって特別なことである。そのため、子どもたちは意欲的に“ショー”に取り組んだと思われる。

何かを人前で披露するという事は、見ている人を楽しませなければならないということである。そのため、見る人の視点に立って行動することが求められる。子どもたちはまだ、自分が楽しむことで精いっぱいである。保育者も、まずは子ども一人一人が自分の表現を存分に楽しめるように援助することを第一と考えている。そこで、この時は、ショーの進行や演目の解説等は保育者が行い、観客である子どもたちに、ショーを披露している年長児の様子や思いを伝える援助を行った。この援助により、披露する年長児は自分の表現活動を存分に楽しめたものとする。そして、観客の子どもたちは、演技中の間で飽きたり、伝わりにくい内容でつまらない思いをしたりすることなく、最後まで楽しく参加できたのではないかと考える。

＜事例④：11月22日（月）＞

19日に遊戯室でショーを楽しんだ子どもたちは、再び遊戯室で遊びを続けようとして登園直後から用具を遊戯室に運び込もうとしていた。しかし、この日は保育者がショー遊びの手伝いができないため、目の行き届きにくい遊戯室では行わないでほしいことを伝えた。そのため子どもたちは、保育室前の渡り廊下でやろうと話合っただけで、手際よく準備を進めていった。

「年長さんが、またショーを見せてくれる」ということで、多くの年少児が観客としてきていた。ショーの進行役は特になかったが、19日に保育者が行っていたところをよく観察していたようで、「次はマジックです」「とても上手でしたね」などと、気付いた子どもが言葉を発し、子どもたちだけで進めていた。

降園前のクラス全員で過ごす時間に、保育者がショーの感想を尋ねると、「面白かった」「大成功」「小さい組がいっぱい来てくれた」と盛り上がった様子を細やかに話してきた。そこで保育者は、「そんなに楽しかったのなら、またお遊戯室でやってみようか。でも、『この前と

おんなじでつまらない』と言われないように、しっかり準備や練習をやるよ」と投げかけた。この投げかけにより子どもたちの意欲が高まったようで、「“ねんちょうなんでもショー”にしよう」と名称を決め、ショーを開くためにすべきことを話し合った。結果、“ねんちょうなんでもショー”は11月25日（木）に行うことと、披露する出し物が決定した。さらに、翌日の23日は祝日で休みであるため、24日の9：00から集まってポスターとチケットをつくり、そのあと出し物の練習をすることを共通理解した。

「遊戯室は使用できなくても、また“ショー”をしたい」という子どもたちの強い意欲が感じられた。進行役も、気付いた子どもが務めていたが、これは遊戯室で行った際、保育者がやっていることをしっかり観察していたからできたことであると思われる。子どもが興味や関心を持った時に発揮される観察力はすばらしい。ここでも、子どもたちの“ショー”に対する思い入れの強さを感じた。

子どもの意欲を大切にしたいという気持ちから、保育者は再度遊戯室で行うことを提案した。ただ、前回と全く同じ内容では面白みに欠けるため、そして、意欲が高まっている子どもたちであれば、さらに面白いショーを目指して取り組むだろうと確信を持ったため、クラス全体を巻き込んでの取り組みとなるよう降園前の時間を使って提案した。予想通り、様々な案が子どもたちから出され、子どもたちの気持ちが一つになっていった。保育者は子どもの考えを肯定的に受け止め、全体に伝えるよう要約するなどして子どもの話をまとめていくようにした。こうして、クラス全員に“ねんちょうなんでもショー”の取り組みについて共通理解がなされた。

＜事例⑤：11月24日（木）＞

F子、M子、R子がとても早く登園し、手分けしながらチケットを約60枚作った。その後、材料置き場から適当な大きさの空き箱を見つけてきて、その中にチケットを保管した。チケッ

トの配布方法も3人で話し合っていた。実は、一昨日から3人で「チケット作ろうね」と話し合っていたらしく、責任を持ってやり遂げていた。他の子どもたちは3人の仕事ぶりに対し、「ありがとう!」「助かる～」とねぎらいの言葉を掛けていた。



9:00にクラス全員が集まり、ポスターの内容を話し合った。日時、場所などを確認し合い、それを保育者が黒板に丁寧にメモした。ポスター作成はグループごとに行った。以前に楽しんだ「水族館ごっこ」や「夏祭り」で経験したことを活かしてグループ活動で作成しようと、子どもから提案してきたのである。どのグループも、保育者が黒板に書いた内容を確認しながら丁寧に作成していた。さらには、出し物の見どころや絵を書き込んだりしており、グループごとに様々な工夫を凝らしながら作成していた。出来上がったポスターは、グループで貼りたい場所を決めて協力しながら剥がれることのないようにと、強力なテープを選んで貼り付けていた。



降園前には、グループごとに他クラスにショーの宣伝を行った。保育者は、事前に、各担任に説明をし、子どもたちによるショーの紹

介時間を確保してもらえるよう手配しておいた。そのため、どのクラスでも歓迎してもらい、自分たちの思いをしっかりと伝えてきていた。

こうして“ねんちょうなんでもショー”の準備が整い、子どもたちは満足した表情で降園した。

F子、M子、R子は、8:30前には登園し、8:40に門が開くのを一緒に待っていたらしい。その時にチケット作りの話がまとまったようである。普段おとなしい3人の主体的な姿を保育者はうれしく感じた。さらに「ありがとう」「助かる～」といった他の子どもたちの言葉から、皆3人の仕事ぶりに感謝している様子がうかがえる。みんなで取り組んでいるショーだという思いがあるからこそその言葉でもあると思う。クラスの友達同士のつながりが深まっていると感じた。

降園前、他クラスに紹介に行くことを提案したのは保育者である。「先生も自分たちの仲間」という思いがあったのだろうか、この提案は子どもたちに速やかに受け入れられた。子どもと保育者が一体となって“ねんちょうなんでもショー”を進めていることを確認し合えた瞬間であった。

<事例⑥>：11月25日（木）

9:10からショーを始められるように、全員早めに登園してきた。保育者が指示をすることなく、自分たちで手際よく準備を進めて会場を整え、チケットを配り、席へ案内しと、自分が今やるべきことは何かを考えて準備を進めていった。



Y子は、プログラムが必要なことに気づき、

①マジック②劇『金のガチョウ』③人形劇④音楽会と、ホワイトボードに書き込んだ。進行役は子どもが順番に担当し、保育者はそばで補助した。



この日は他園の先生方を招いての公開保育の日であったため、他クラスの子どもに加え、他園の先生方も観客として参観された。沢山の拍手を受け、子どもたちは大満足の様子であった。

降園時刻が10:30と早かった為、プログラム②番までのショーとなった。子どもたちは、「続きは明日します」「また来てください」と観客に伝え、ショーを終了した。



公開保育の日にショーの本番となったことで多くの観客に披露することができた。子どもたちにとって充実感や満足感を味わえる遊びとなった。公開保育とショーが重なるように計画したのは保育者である。先を見通し、意図的・計画的に指導計画を立てることの必要性を痛感した。

<事例⑦>：11月26日（金）

9:30から前日の続きを行う。観客は園の子どもたちと保育者、教育実習生と少なくなった

が、拍手や言葉かけで盛り上げてもらい、大盛況であった。存分に遊んで満足したH男は、「ショーはもういいね」と、保育者に笑顔で言ってきた。他の子どもたちも「楽しかったね」「またしようね」と、会場をきれいに片付けた。

ショー終了後の片付けに、どの子どもも積極的に取り組み、非常にスムーズであった。その時の子どもたちの表情はとても穏やかで、遊びをやりきったという満足感でいっぱいであることが伺えた。

この時の経験は、3学期の「お遊戯会」で生かされ、クラスのみならず、隣のクラスを巻き込み年長児全員でお遊戯会を作り上げることにつながった。

4 子どもの主体性を支え育むための援助

「ねんちょうなんでもショー」の事例より、協同遊びの中で子どもが主体性を発揮している姿や保育者の関わりについて振り返ってきた。ここで、事例を基に、子どもの主体性を支え育むための保育者の援助について考察したい。

(1) 保育者や友達との信頼関係の構築

本稿に示した事例は、遊びの流れが分かるようにという目的から、細かな部分は省略している。実際、子ども同士の言い合いなど、意見が合わずに口調が強くなる場面も見受けられたが、いつの間にか言い合いが収まって遊びが進んでおり、大きなトラブルは見受けられなかった。このような姿が見られるのは、子どもが友達と関わりながら遊びを進める中で、互いに気持ちを伝え合うことや折り合いをつけることを経験し、それらを身につけてきたためだと思われる。つまり、意見が違って話し合いにより、100パーセントとはいかずともそれぞれの思いは実現できることを経験し、その結果、互いに信頼し合って気持ちを伝え合うことができるようになったからではないかと考える。当然ながら、このような姿はすぐにみられるようになるものではない。子ども同士のトラブルごとに保育者が見守り、必要に応じて丁寧な関わ

りを続けることで徐々に身についていくものである。保育者は、子ども一人一人の思いを受け止め、子ども同士を丁寧につなぎ合わせていく援助を続けていく必要があると考える。

子ども同士の信頼関係を気付くためにも、まずは保育者との信頼関係が大切であると思われる。どのような援助でも、子どもが保育者を信頼していなければ、子どもは素直に保育者の言動を受け止めることはない。保育者との信頼関係があるからこそ保育者の言葉に耳を傾けたり自分の気持ちを素直に吐き出したりできるのである。また、子どもが主体性を発揮するためにも、保育者との信頼関係は大切である。「先生は、自分の言動を受け止めてくれる」「自分は、園でやりたいことを自由にやっていたんだ」という気持ちを持つことでようやく主体的に環境に関わるようになるためだ。よって保育者は、日々の保育の中で子どもの言動を肯定的に受け止め、適切な援助を機会をとらえて行うことで、子どもとの信頼関係を築いていく事が大切である。

(2) 子ども理解とそれに基づく保育計画の立案

<事例①>にあるように、当番のグループが遊びを提供し、クラスみんなで楽しむ時間を作る取り組みは、保育者がクラスの子どもの実態と、そこから見えてきた育ちに対する願いから導き出された活動である。始めてから2か月間見守り続けてきたが、やはり子どもたちだけではネタが尽きたり新たな提案をする術が分からなかったりしていた。そこで保育者は、何を切り口に新たな動きができるようにするか、さらに、子どもが受け入れやすい提案の仕方はどのようなものかと考えて準備を進め、短期の指導計画に明記できる機会を探っていた。そこに、F子とM子の姿が目に入ったのである。1か月近く機会をうかがっていたため、F子とM子の姿を見逃すことなく、遊びの発展に繋がられた。

また、「ねんちょうなんでもショー」を、公開保育の日に重なるように保育を進めることも、子どもに任せておくだけではできなかったことであろう。目の前の子どもたちの主体性を引き出すた

めにはどのような関わりが良いのか、どのような言葉かけが伝わるのだろうか。日々の子ども理解の積み重ねがあつてこそ、子どもたちの主体性や意欲を高める援助が可能となる。保育の計画を綿密に立ててこそ、子どもの主体性を大切にしながら、遊びのピークが公開保育の日に重なる展開ができたと考える。「ねんちょうなんでもショー」は、まさに、「子どもの主体性」と「保育者の意図性」がバランスよく絡み合った活動となったといえよう。

(3) 保育者集団の連携

子どもが主体性を発揮して生活するということは、園内の様々なところで様々な思いや考えで活動をしていくということである。他クラスの保育について、また、他クラスの子どもの様子について、日ごろから密な情報交換をし、すべての保育者が担任保育者と同じ思いで子どもに関わることが、子どもの主体性を大切にすうえで重要であると思われる。

本稿に示した事例の園では、毎日保育終了後に「情報交換」の時間を設け、各保育者がクラスの保育や子どもについて意見を出し合い、ねらいを共有して保育に携われるよう工夫していた。そのため、「ねんちょうなんでもショー」に対する保育者の思いが共有され、全ての保育者が一つになって子どもたちの主体性を支えることができていた。事例⑤で、子どもたちが降園前に、グループごとに他クラスでショーの紹介をしているが、これも、突然子どもたちが保育室になだれ込んできては、そのクラスの保育の邪魔をすることになってしまう。事前に保育者同士が保育について共有できていたからこそ、子どもたち自身が紹介するという行動が可能となったと思われる。このように、子どもの主体性を尊重し、さらに育む保育を展開するためには、保育者同士の密な連携が欠かせないと考えられる。

(4) 保育者の役割の再確認

幼稚園教育要領に、「幼児の主体的な活動を促すためには、教師が多様な関わりを持つことが重

要であることを踏まえ・・・様々な役割を果たし・・・。」と記してある。幼稚園教育要領解説には、様々な役割として、「活動の理解者」「協同作業員」「共鳴する者」「モデル」「遊びの援助者」が挙げられている。「ねんちょうなんでもショー」の事例を見ていくと、確かに保育者は、これらの役割を場面に応じて果たしていると見て取れる。

「子どもの主体性を大切にすること」を意識しすぎると、子どもの思いや要求を全面的に受け入れていくように思われがちがあるようだ。しかし、「協同作業員」の役割を担うとすれば、子どもの気持ちを汲み取って共に活動を進めていくだけでなく、保育者も仲間の一員として意見を出したり異議を唱えたりできるのではないだろうか。子どもは経験が少ないがゆえに先が見通せず、保育者からは注意や禁止をした方が良いことでも構わずに進めていく場合がある。そのような時、保育者として上からの立場でものを言うというよりも、仲間の一員として伝えることにより、一層保育者も含めた連帯感が高まるように思われる。意見や禁止の場合だけでなく、提案や希望等も仲間の一員として子どもに伝えることが、子ども自身、自分たちの思いや考えが大切にされている、つまり、主体性が大切にされていると感ぜられるのではないだろうか。

保育者としての立場で子どもを見守ったり援助をしたりするだけでなく、保育者も、その主体性を大切にされる立場であることを意識し、子どもと共に活動を楽しみながら役割を果たして行くことが重要であると考えます。

5 おわりに

子どもの主体性を大切にしたい保育について、そして、その主体性を支える保育者の援助について、事例を読み解きながら考察した。保育現場では、まだ、保育者が主導して保育を進めているところが少なくない。子どもに必要であると考えられる活動を指導計画に細やかに組み込み、一斉保育の中で提供している。しかし、今、そのような保育を行っている園から「子どもの主体性とは何か」「子ど

もの主体性を大切にしたい」という声が多く上がっているように感じる。次期学習指導要領の改訂に向けた取り組みが始まった今、保育の基本を再確認し、子どもの主体性について日々の保育実践をもとに考えを深めていく事が重要であると考えます。

参考・引用文献

- 1) 文部科学省「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」2024
- 2) 文部科学省「幼稚園教育要領解説」フレーバル館、2018
- 3) 文部科学省 厚生労働省 内閣府「幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領」チャイルド本社、2018
- 4) 河邊貴子『遊びを中心とした保育－保育記録から読み解く「援助」と「展開」－』萌文書林、2005
- 5) 久保健太編著『写真と動画でわかる！主体性から理解する子どもの発達』中央法規、2024
- 6) 横山真貴子「社会と共有する幼児教育の基本－子供の現在と未来を輝かせるために－」『幼児教育じほう』（4・5月号）全国国公立幼稚園・こども園長会、2025
- 7) 河合優子「『遊びを通して学ぶ』を再考する」『幼児教育じほう』（6月号）全国国公立幼稚園・こども園長会、2025
- 8) 長崎大学教育学部附属幼稚園『遊びにおける幼児の主体性と教師の意図のバランスに関する研究』令和6年度文部科学省委託研究、2025